

中国農村社会の発展

——とくに城東人民公社を中心として——

北
崎
耕
堂

は し が き

上海市郊外の嘉定県に、城東人民公社が誕生したのは、一九五八年九月二十一日であった。この人民公社は、『社会学部論叢』第十五号（昭和五十六年十一月発行）において論述してきたように、その特長は「一に大、二に公」という点にある。大というのは、この人民公社の規模がもとの高級生産協同組合をはるかにうまわっているし、その根底には、多くの下層中農や貧農たちの、耐えられないほどの搾取に耐えてきたという根強さと、積極的な取り組みとがあったことである。そして、公というのは、土地所有の公有化の程度が、高級生産協同組合のそれよりも高いことである。とくに、人民公社が政社合一（政権と経済組織を一つに結びつける）となったので、中国共産党中央委員会（以下党中央と略す）が国家の幹部（党政政府機関の幹部）を派遣して、人民公社の指導体制を強化していった。

一九五八年十月の末、城東人民公社の社員たちは、公社を成立して最初の秋の農繁期の仕事に取り組んでいた。この人民公社の社員というのは、かつての雇農、貧農、下層中農を中心とした農民たちである。かれらは、それこそ長い年月にわたって、地主や富農、市街地に居住している豪商やブルジョアたちの搾取にあって、見返りの少ない苦しい生活を強いられてきた。しかし、公社級の集団経済は、社会主義の国がとっている国家所有制であるから、生産高が上昇すればそれに従って所得の分配も上昇することになる。それに、この国家所有制がその要素となってくると、それまで高嶺の花であった大型農機具の導入も可能となってきた。たとえば、トラクターステーションや電力灌漑排水網、公社経営の工場や大型牧場といった、いわゆる生産協同組合では成しえなかった企業や事業を、国が資金を投

入して成し遂げたことである。

このように、城東人民公社や七一人民公社（上海県につくられた公社）をはじめとして、上海市郊外において成立し躍進を続けている人民公社をみた党中央は、一九五八年十二月に、「人民公社についての若干の問題に関する決議」を採択して、名実ともに公社級の集団経済を押し進めていった。とくに、この城東人民公社は、農業（林業、牧畜業、副業、漁業を含む）がその中心であるが、工業、商業、教育、軍事を統一的に指導できる点で、はるかに高級生産協同組合の範囲を越えていた。それは、前に述べたように政社合一、つまり、社会主義社会の農村の基礎組織であると同時に、プロレタリア階級独裁の国家権力の農村における基礎組織でもあった。この農村における基礎組織としての人民公社は、統一的な公社組織のもとで、労働力と生産手段が以前よりも合理的に有効に使用されて、すべてに積極的な要素を効果的に動員することができたので、その年の秋の目標を見事に達成することができた。

こうして高級生産協同組合から人民公社になってからは、多角経営が急速に発展した。そして、人民公社は専業の牧畜場と優良品種の飼育場をつくった。一九五八年末現在、城東人民公社の養豚数は三五、五三三頭であって、前年度と比較して六〇パーセント増となった。そのほかの家畜や家禽もみな大幅に増えた。また、この城東人民公社が経営している工業もますます成長し、この年の暮れの工場の資産は、約二四万元に達した。これも四カ月前と比較して、約五〇パーセント程度の伸びをみせているのである。これらの工場には、農業機械工場をはじめとして、化学肥料工場、野菜加工工場、細菌肥料工場、農薬工場などを含んでいるが、いずれも農業生産に奉仕するという顕著な特長をもっている。

このように、組合組織から公社組織へと移行したことによって、生産高は著しい伸長をもたらして、農業経営は予想以上の成果を上げることができた。しかし、この公社組織による農業経営も、帆一ぱいに満風を受けてというわけ

にはいかなかった。翌年から三年続きで発生した自然災害もさることながら、かつての地主階級やブルジョア階級による巻き返しを狙ったところの、いわゆる反動的な済し崩し運動が生起してきたことである。

したがって、この小論においては、人民公社の社員たちが、それまでに階級敵との闘いを続けてきたことの事実を踏まえて、やがて押し寄せてきた文化大革命のなかでも、連帯と団結とによって乗り越えてきた雄々しいすがたを論じてみたい。とくに、反動路線に対して挑んだところの闘いは、まさしく血みどろの闘いであった。この血みどろの闘いは、革命委員会を成立させ、さらには社会の諸制度を改革させることになった。この点についても、許せるかぎりにおいて論究したいと思っている。

一 文化大革命の兆し

(一) 反動路線の批判

一九五九年から一九六一年にかけて、上海市郊外の農村地帯は、三年続きの自然災害に見舞われた。このとき、中国共産主義の裏切り者集団は、突然社会的な「契約」を破棄して、党中央から派遣していた専門家（党中央の幹部）を引き揚げさせて、それまでの借款の返済をせまった。かれらはまた、帝国主義者や反動派と結託して、新たな反中国の潮流を巻き起こした。とくに、中国共産党におけるブルジョア階級司令部は、党内部からこれに呼応して、一九六二年一月に拡大中央工作会議を開いて、革命路線と称して「三自一包」（自留地を拡大して自由市場を発展させ、損益ともに自らが負うという企業をつくって、生産も一戸ごとに請負わせる）の推進について話し合った。当時の人民公社は、躍進に躍進を続けていたが、ブルジョア階級司令部は人民公社の集団経済に対して、あくどいほどの攻撃

をかけてきた。そしてかれらは、資本主義路線の復活をもち出してきたのである。

ちょうどこの時期に、まだ改造されていない一部の地主や富農たち、さらには右派分子たちが波風を立てて共鳴し、社会主義的な農業生産に対して攻撃をかけてきた。とくにこの「三自一包」の影響を受けたのは、現実の集団経済が、労働点数によって平等に分配されるということに不満を抱いていた、かつての富農や富裕中農たちであった。かれらは、この風潮の盛り上がりを見て、それまでやってきた集団労働には見向きもせず、自留地の栽培に没頭したり、終日、魚や貝類を捕っては自由市場で高く売っていた。こうした一部の反動分子の動きは、農村の資本主義の自然発生的勢力を大きく助長した。そしてかれらは、中国共産党上海市委員会内の、資本主義の道を歩もうとしている実権派幹部の指導をうけて、社会主義経済を攪乱しようとしたのである。しかし、こうした反革命的な路線に対して断固として反対したのは、かつて貧困の苦しみを嫌というほど経験している、雇農、貧農、下層中農に属していた人民公社の社員たちであった。こうして、城東人民公社においても、二つの階級、二つの道、二つの路線の闘争が繰り広げられることになった。

この二つの路線のうち、まず、反動路線について述べてみよう。当時、城東人民公社にきていた上海市委員会の実権派幹部は、「六十条」（人民公社の性質、組織、規模、所有制、分配制度、各クラスの職責、经营管理、内部の關係、党の指導などについて、明確に規定したものである。この「六十条」の草案は、一九六一年六月に補足・改訂されて、修正草案となった。さらに翌年の二月、党中央委員会は、人民公社で生産隊を基本採算単位とすることを決定した）の規定は間違っていると指摘して、基本採算単位としての生産隊の分割を計った。城東地区において、とくにこの資本主義の道を歩む実権派の影響をうけたのは、第三農業生産大隊の第五生産隊であった。そしてこの第五生産隊は、当時三五世帯でもって構成されていた。しかも三五世帯のこの生産隊は三つの集落から成っていて、そのうち

には、七世帯しか住んでいない部落もあった。その構成は、貧農・下層中農が二戸、富裕中農が三戸、富農が一戸、それに反革命分子の家が一戸となっていたのである。

こうした部落構成は、かつて国民党が中国全土を支配していたころの農村における階級制度と、農民たちの生活とに大いに関係がある。それというのは、旧社会において、雇農・貧農・下層中農の生活は貧しくて苦しいものであった。しかし、富裕中農や富農の生活は、地主やブルジョア階級のそれには及ばないにしても、ある程度の豊かな生活であったことはいうまでもない。ところが公社経済は、人民公社の社員である以上、過去の身分がどうであったにせよ、現実には労働点数によって賃金が評価されるのであって、所得分配という点においては平等である。したがって、こうした所得分配の平等ということに対して、とくに富裕中農以上の階級にあった人たちにとっては、こうした人民公社の集団経済になじめないということもあって、絶えず不満を抱いているものも多かったということである。そんなときに、前述の「三自一包」という反動路線を掲げて、上海市委員会の実権派の幹部がやってきたのであるから、かれらが共鳴しない筈はなかった。そこでかれらは、自分たちが属している第五生産隊内はもちろんのこと、周辺の生産隊に所属している反動分子にも積極的呼びかけて、自由市場の発展と資本主義の解放とに力を注いでいった。そのために、城東人民公社のなかにおいても、第三生産大隊の第五生産隊を中心として、自由市場は空前の盛況を呈した。最高潮のときには、私設の露店が三、四百軒も連なっていて、国家が統一的に購買し販売している米や食料油、布などまでが自由市場に流れ込んだという。

こうして、自由市場が盛況となるに従って、生産隊の分割が可能であることを知ったから委員会幹部たちは、「農民大衆が生産隊の分割を要求している」ということは、人民公社の集団経済のしくみの中に矛盾があることを示している。これを解決しなければ、一部の社員の積極性に影響してくる。現在、国家の財政経済が困難なとき

に、すべての人の積極性を引き出さなければならない。そのためには、農業生産を高めるのだ。たくさん生産するのだ」⁽¹⁾

と扇動して、生産隊の解体を計ったのである。こうして、第五生産隊をはじめとして、かつての地主や富農分子が割合に集まっているいくつかの生産隊では、基本的な採算単位である生産隊を分割することによって、自分たちの優位をつくり上げていった。ある生産隊では、一部の富裕な社員が、貧しい社員を締め出そうとする状況もあらわれてきたのである。

次に、これらの反動路線に対して、社会主義の経済路線ともいうべき、革命路線を守った人たちについて述べてみたい。この革命路線は、とくに農村においては、長い歴史のなかで搾取と貧困のために苦しめられてきた、いわゆる雇農や貧農、下層中農の階級に属していた人たちによって支えられていた。絶対数においては、下層階級に属していた人たちがはるかに多いのであるが、こと力関係では、そうであるとはっきりと言い切ることはできなかった。しかしかれらには、たとえ党中央の積極的な指導があったとはいえ、地主や富農たちによるあくどい搾取に対して闘いを挑み、力を結集して土地改革を成し遂げたという得難い経験があった。そしてまた、あるときには自然災害に遇っても連帯によってこれと立ち向かい、生産を立派にやり抜いたという体験をもっていた。こうした貴重な経験や体験は、下層階級にあった社員や各クラスの幹部たちをして、自己批判の機会を与えることになった。

城東人民公社の第三農業生産大隊第七生産隊は、一九五九年に隣接する生産隊に調整されて、四〇戸で生産隊が構成されていた。革命委員会の資料によると、この第七生産隊は、四〇戸のうち三七戸までがかつての下層階級に属している人たちであった。したがって、上海市委員会が送り込んできた反動路線の幹部たちが推進している、いわゆる自由市場を発展させることに断固反対したので、隣接している第五生産隊のように、集団生産を目茶苦茶にされると

というようなことはなかった。そしてかれらの、修正主義路線によって保護されている自由市場は、「資本主義を發展させる自由をもち、党中央が主唱する国家の計画を破壊する自由をもつ」ものであると批判した。さらにかれらは、「このようなよこしまな風潮をここで阻まなければ人が駄目になり、土地は荒れ、世の中が変わってしまう」と、資本主義の復活を助長しようとしているこうしたやり方に反対して、社員が連帯して行動を起こしはじめた。四〇戸のうち三戸は、かつて富農に近い富裕中農であったので、社員たちが黄金瓜を取り入れているときに、「最初の瓜は香りがよく、甘くて口当たりがよい。自由市場にもっていけば高い値で売れるから、その瓜を売って社員で分けよう」と密かに呼びかけた。このことを知った呉恵芳の父（城東人民公社の幹部）は、これは問題であるということで、早いうちに手を打たなければ、隣接の第五生産隊のようになってしまうと心配して、急いで第七生産隊内の社員たちを集めて、「国家が割り振ってきた任務をそっちのけにして、集団みんなの生産物を自由市場へもって行って売るということは、絶対に許してはならない」と意見したという。

こうした少数の社員が反動路線の扇動によって、是非の見分けがつかないままに、集団経済を切り崩そうとしていることを知った生産隊内の幹部たちは、再三、再四にわたって相談して、「むしろ第七生産隊の社員は、絶対に社会主義の集団生産の土台を崩してはならない。資本主義と少しでもかかわり合いをもつのはご免だ」といって、社員みんなの集まりのなかで討議して、資本主義勢力に反撃を加えることを決議した。同時にこれから生産隊の幹部たちは、それまでの一時期、大衆に対する政治思想工作をおろそかにしてきたという事実を確認して、その欠陥と誤りについて自己批判した。そして、革命委員会の資料には、

「生産隊内部にこうした誤った傾向が出たということは、階級敵がつねに社会主義の集団経済を破壊しよう企んでおり、一方また、少数の者のなかにある資本主義思想が敵に利用され易いということを示している。だから

ら、農村のこの陣地は、社会主義が占領しなければ必ず資本主義が占領してしまう。われわれは、大衆と団結し、大衆を教育して、資本主義の勢力に手きびしい打撃を加えなければならない」⁽²⁾

と指摘している。こうして、城東人民公社内の生産隊委員会は、この指摘にもとづいて人民大衆を立ち上げさせて、黄金瓜を自由市場で売らせようと唆した一部の社員を批判するとともに、社員全体に二つの道の闘争についての教育をおこなった。社員大衆は、こうした反動派路線との闘いのなかで自覚を高めていった。このときのことについて資料は、

「自由市場に持っていくって高く売ることばかり考えて資本主義的傾向をこのまま発展させると、社会主義に背くことになり、都市の労働者階級にも申し訳がない。兄貴分の労働者は、いつも一番困っているとき、一番必要なきにわれわれを支援してくれた。われわれは互助組をつくった年にひどい日で見舞われたが、あのときもポンプを持ってきた早魃との闘いを助けてくれ、いっしょに水を畑へ運んでくれた。いま、都市の労働者階級は、われわれが工業原料や農産物、副産物をたくさん送るのを待っている。どうしてかれらを忘れることができるよう」⁽³⁾

と述べている。こうして社員と幹部たちとは社会主義の自覚を高めたので、自由市場における売買や、個人に分けることが阻止されたために、黄金瓜の国への売渡し任務を二八パーセントも上回って達成し、国家のステーションから表彰を受けたという。

一九六二年の夏、城東人民公社の下層階級に属していた社員たちは、「三自一包」に反対して闘っていた。そのころ、まだ改造されていない一部の地主や富農、反革命分子や右派分子たちは、帝国主義、反動派の反中国的な実権派の扇動によって、修正主義の巻き返しを繰り返した。そして、人民公社の集団経済とプロレタリア階級独裁とに、直

接危害を加えようとしたのである。

(二) 革命委員会の成立

搾取の歴史の舞台から退こうとしないかつての地主や富農たちは、国家に奪いとられた土地や生産手段について、寝てもさめても忘れることができなかった。第五生産隊のなかには、地主や富農階級に属していたものが比較的に多かった。そのなかの地主であった一人は、解放前に治安維持会長をやった経験をもっていて、商工業も経営していた。当時、かれは貧農や下層中農の人たちに金を貸したことがあったということで、何か不利な事態が生じると当時のことを持ち出して、「覚え書」を見せて借金の返済を迫った。かれもまた、かつての搾取時代のことを忘れられず、夢を追いつめていたのである。第三生産大隊の党支部は、こうした連中の巻き返しの策動を暴いて、階級的な支配の復活に対して憎しみを込めて批判した。そして、社員大衆と連帯して闘争し、反革命の氣勢を打ち砕くために立ち上がった。

しかしながら、反革命分子の抵抗も後を断たず、機会あるごとに巻き返しを繰り返して、社会主義の所有制を変え、地主やブルジョア階級の私有制の回復をはかっていたのである。そして、私有制の回復という目的のために、かれらは直接、社会主義の経済的な土台を破壊しようとしただけでなく、思想政治の領域でもプロレタリア階級に攻撃をかけた。すなわち、孔子や孟子の教えの道を宣伝して、封建的な資本主義や修正主義の腐り果てた思想をばら蒔いて、これによって社会主義の経済的な土台を切り崩そうとしたのである。

城東人民公社でも、覆された搾取階級の一部のものが中心となって、広場や劇場などで語り物や芝居を演じ、こうした機会を利用して、旧社会の思想を大量に撒き散らした。青年層の社員のなかには、こうした旧社会の思想に毒さ

れて毎晩のように通い続けて、昼間も仕事に力が入らず、すっかり反動路線のとりこになってしまった者さえいた。それは、人間を抜け殻のようになってしまうやり方であった。また、こうした一部の反革命分子は、集団経済の指導権を直接奪い取ろうと企んだ。それだけではなく、かれらは公社の一部の幹部に取り入って、自分たちの子どもを人民公社の会計係や保管係の役に付かせることによって、集団経済を破壊しようとしたのである。そのために、上辺だけは積極的な社員のように仕立て上げられていたとしても、階級闘争については認識不足もはなはだしくて、むしろ破壊的な行為に走る者も多かった。なかには、役職についているという権限を利用して、下層階級に属している人たちの積極的な取り組みに対して、階級的に報復手段の方法をとった者もあった。このように、実質上は、潜り込んだり引き入れたりするかれらの手口に掛かって、指導権が変質分子たちの手に握られてしまったところもあった。たとえば、第五生産隊の場合がまさしくそうであって、指導権は、事実上かつての地主や富農たちに帰してしまった生産隊もあった。

この驚くべき階級闘争については、下層階級にあった社員たちはすでに気がついていたし、心を痛めていた。この人たちの多くは、食事ものを通らず、夜もぐっすりとは眠れなかったという。あるときには夜も更けてから、旧社会の時代に貧困との闘いを続けるかたわら、乞食をしたときに使った血と涙の染み込んだ杖やぼろぼろになった服を取り出して、じっと眺めることもあった。そして、階級闘争のきびしい情勢を分析して、反動分子の攻撃を退ける方法について考えを巡らしていた。多くの下層階級に属している社員たちは、抑圧され、搾取される苦しみを知り抜いているので、社会主義の祖国が変色しないよう守り抜くことの重要さを、もっともよく知っていた。したがって、社員大衆は、反動分子の資本主義路線の復活の動きをみても、むしろ憎しみを込めてこれを批判し、反撃に出るのを切実に望んでいたのである。

一九六二年九月、中国の空に暗雲が立ち込めていたときに、毛沢東主席は、中国共産党の第八期中央委員会第十回総会で、全党員と全国人民とに向かつて、「階級闘争を決して忘れてはならない」という戦闘的な呼びかけをおこない、次のように奮起をうながしている。すなわち、

「社会主義社会は、相当長期にわたる歴史的段階である。社会主義というこの歴史的段階においては、なお階級、階級矛盾と階級闘争が存在し、社会主義と資本主義との二つの道の闘争が存在し、資本主義復活の危険性が存在している。このような闘争の長期性と複雑性を認識しなければならない。警戒心を高めなければならない。社会主義教育をおこなわなければならない。階級矛盾と階級闘争の問題を正しく理解し、処理し、敵味方の矛盾と人民内部の矛盾を正しく区別し、処理しなければならない。さもなければ、われわれのこのような社会主義国は、その反対の側に向かい、変質し、復活があらわれることになる。われわれはいまから、この問題について、毎年語り、毎月語り、毎日語って、われわれが比較的是っきりした認識をもつようにし、マルクス、レーニン主義の路線をもたなければならない」⁽⁴⁾

と指摘した。毛主席が自ら定めたこの社会主義の基本路線は、中国共産党の全歴史段階における革命路線を提示したものであって、同時にこのことは、継続革命の道を明らかにしたものだといえよう。

城東人民公社の下層階級の社員大衆および各クラスの幹部は、毛主席の指示と、第八期中央委員会第十回総会の公報の学習に熱心に取り組んだ。そして、解放後、とくに人民公社をつくってから二つの階級、二つの道の激しい闘争を振り返って、階級闘争のなかで連帯を強めていった。こうして、社員大衆の連帯の前に復活の望みを覆されたかつての地主や富農たちは、つねに資本主義の復活の望みを扇動している、上海市街地に居住している反革命路線の指導を受けて、なかなか屈しようとしなかった。そのみか、復活の望みを復活の行動に変えようとして、かれらの失

った天国を取り戻そうと夢みるものもなくなかった。また、小生産者の自然発生的な資本主義的傾向、旧社会の習慣の力、それに思想政治の領域におけるブルジョア階級の影響も長期に存在していた。このことが、上海市郊外の農村における二つの階級、二つの道、二つの路線の闘争を必然的に生起させたのであった。

こうした二つの路線の闘いのなかで、第八期中央委員会第十回総会を学び続けてきた城東人民公社の社員と幹部たちとは、大きな勝利を収めることができた。しかしこれは、飽くまでも初歩的なものにすぎなかった。資本主義勢力の狂気じみた復活の動きを徹底的に阻止するためには、さらに一步進んで、政治、経済、思想の各方面において、反動分子と真正面から対決して闘いを挑む必要があった。

一九六三年の夏、上海市郊外の人民公社ではじめられた社会主義教育運動（都市と農村で進められたこの運動は、後に四清と呼ばれた。つまり、政治、経済、思想、組織を清める運動）は、毛沢東主席が自ら定めた「当面の農村工作におけるいくつかの問題についての、中国共産党中央の決定」、すなわち「十カ条」にもとづいて、段取りを追って繰り広げられたものであった。この「十カ条」は、さきに『中国プロレタリア大革命資料集成』より引用したように、「社会主義社会は、相当長期にわたる歴史的段階である。社会主義というこの歴史的段階においては、階級矛盾と階級闘争が存在し、社会主義と資本主義との二つの道の闘争が存在し、資本主義復活の危険性が存在している」との確認であって、そのことについて一度ははっきりと指摘したものである。そして、当時、中国の社会にあらわれた重大にして鋭い階級闘争の状況に即応して、

「いかなるときも階級闘争を忘れてはならず、プロレタリア階級独裁を忘れてはならず、貧農、下層中農にたよることを忘れてはならず、党の政策を忘れてはならず、党の工作を忘れてはならない」⁽⁵⁾

と中国全土の党员と人民大衆とを戒めたのである。さらにまた、この「十カ条」は、多くの人民大衆を正しく指導し

て、二つの階級、二つの道、二つの路線の闘争を推進している。そして、中国全土の政治を清め、経済を清め、思想を清め、組織を清めるという四清運動を展開していった。この四清運動は、社会主義と資本主義との二つの路線の間に生起している矛盾と、人民大衆の内部に起こっている矛盾とをはっきり区別することによって、多くの社員大衆と幹部たちとを團結させて、反社会主義的分子と闘いを挑むことであつた。とくに、党内にまぎれ込んで、指導的地位をかすめ取つたブルジョア階級の代表に対して、連帯して当たらなければならなかつた。そして、その誤りの程度に差はあつても、誤りを犯した幹部に対する党の方針は、「説得と教育とによって、汚れを洗い落とし、軽がるとした出で立ちで戦列に加わらせ、團結して敵に当たる」というものであつた。

城東人民公社では、一九六四年前半に、「面」（点に対する面であつて、点を面にまで広げることである。つまり、一つの所で経験を積み重ねて、それを全般に押し広めるといふのは、党中央が一貫して教えている唯物弁証法的な活動方法である）での四清運動が繰り広げられた。この運動は、「十力条」の宣伝と学習を基礎にして進められた。中国共产党嘉定県委員会、県委員会の機関と人民公社の機関の一部の幹部でつくられた四清工作隊を送り込んだ。貧農や下層中農の代表と、人民公社、生産大隊、生産隊の三クラスの幹部が参加して開いた会議では、「十力条」の基本精神を一だんと深く学習するとともに、公社内の党委員会の仕事のなかの欠陥や誤りを批判した。そして、公社内の党委員会は、中国共产党第八期中央委員会第十回総会のあと、いくつかの不正な風潮を押し留めたものの、社員大衆をまだ十分に立ち上がらせていないし、「十力条」に従つた積極的な運動を深めていないと指摘した。そこで、公社内の党委員会は、この批判を受け止めて、社員大衆と幹部たちとを率いて、運動を立派に成し遂げるために革命委員会をつくることを決意した。

このようにして、革命委員会を成立させるために立ち上がった公社内の委員会は、社員大衆や幹部たちが積極的に

この運動に参加するように励まして、あれこれの誤りを犯した一部の幹部を啓発し教育して、自分から進んで汚れを洗い落とすように指導した。そして、精神的な重荷をおろし、身軽になって反動分子に当たるように導いた。三クラスの幹部会議のあと、城東人民公社の社員大衆と幹部たちとは、「十カ条」の宣伝につとめ、説明する運動の高まりを一層盛り上げて、階級闘争の情勢を大いに語り、革命的な氣勢を盛り上げた。同時に、「十カ条」の指示に従って、木目こまかい調査研究を進めて、四清運動が党中央の革命路線に導かれて、さらに深く繰り広げられるために十分な準備を行なった。

こうして、四清運動の実行につとめた城東人民公社では、大衆組織、人民解放軍、それに革命的な幹部の代表による「三結合」の指導グループがつくられて、やがて城東人民公社に革命委員会をつくるための土台となった。この「三結合」の革命委員会は、プロレタリア文化大革命（革命的な人民による奪権闘争である。これが闘争の段階に入ったとき、人民解放軍の指導者や戦闘員からなっている少人数の左派支持隊は、工場、人民公社、学校に入って革命的な人民を支持した）のなかでの労働者階級と、人民大衆との一つの創造であった。それは、社会主義の経済的な土台の必要に一層よく適応していた。そして、プロレタリア階級独裁を打ち固めて、資本主義の復活を防ぐ必要にも一層よく適っていた。こうして党中央の革命路線に導かれて、数年間にわたって十分な準備を整えたのち、一九六八年一月の末、城東人民公社革命委員会が二つの階級、二つの道の激しい格闘のなかから勝利のうちに誕生した。多くの社員大衆は、革命委員会の成立とともに、プロレタリア文化大革命の新たな勝利を勝ち取る闘いを開始したのである。

二 生産方式と諸制度の改革

(一) 農業生産を大寨方式に学ぶ

四清運動が繰り広げられていたところに、城東人民公社は、毛主席の「農業は大寨に学ぼう」という呼びかけのもとで、社員たちは農業の生産方式を大寨に学ぶ大衆運動を展開していた。一九六五年の冬、公社内の党委員会は、社員大衆や幹部たちを立ち上げらせて、人民公社、生産大隊、生産隊の生産計画を定めて、生産経験の交流会や生産技術の講習会を開いて、増産の措置を着実に実行に移した。社員大衆と幹部たちとは、心を一つにして力を合わせ、一九六六年の農業生産の大豊作を誓った。

城東人民公社は、「大寨に学び、大寨との隔たりを見つけ、大いに意気込む」集会を開いた。集会の席上集まった社員大衆は、毛沢東主席の呼びかけに答えて、一九六四年に大寨に学び始めて以来の状況を振り返って、大寨方式の先進的な経験と照し合わせて、多くの隔たりを見つけ出した。それは、自分たちは先進的であるという荷物を背負って、盲目的に自己満足をしていること、農業の「八字憲法」（一九五八年、毛主席が農業の経験を締め括って制定した農耕の綱領であって、土、肥、水、種、密、保、工、管の八項）を真剣に実行しないで、一部の措置を着実に実行するのを怠ったこと。また、経営管理制度が健全でないために、浪費現象が少なくないこと。調査研究を重視しないで、着実に実践する作風に欠けている幹部がいるということ。とくに、社員のなかには、旦那さんや坊ちゃんの野良仕事の作風があって、自力更生のできない革命精神の弱い人たちもあった。しかし、こうした人たちも、集会で先進的な大寨方式の経験を学んだことによって、隔たりを見つけ、その原因を調べ、措置を定めることによって、農業生産の新しい高まりをみせたのである。

革命委員会から入手した資料によると、城東人民公社では、どの生産大隊、生産隊においても、社員大衆と幹部と

が団結して立ち上がって、田畑を平らに整地し、農地を改造することに努めた。そして、第三農業生産大隊の第七生産隊では、農地の基本的な建設計画を立てて、これにもとづいて生産隊内の八〇パーセントの労働力を投入して、早朝から夜間にかけての作業が四五日間も続けられた。このことによって高低のあった田畑約七ヘクタールの土地を平らに整地し、畑のなかにあった古い墓地一二四基を取り除いて、耕地面積を拡張したという。そしてこの作業には、六十歳を越した貧農の婦人社員までが、体も弱いのに毎日働きに出た。「大寨に学ぶのに年など関係はない。もったが担げなくても土を入れる手伝いぐらいはできる。わたしもそうすることによって、集団のために力を尽くすことができる」といって、力強く働いたという。こうして社員大衆が一致団結して事に当たったので、この第七生産隊は、大寨に学ぶ運動で大きな成績を上げて、上海市の「大寨に学ぶ先進単位」として選ばれた。第七生産隊の社員たちは、一カ月にも満たないうちに、幅九〇メートルもある古い河川を埋め立ててしまった。かれらは、「大寨では山を移したんだ。わしらは河川を埋めて田畑をつくり、食糧を増産して、ベトナム人民の抗米救国戦争を支援しよう」というのであった。

一九六六年の春、綿畑に害虫が発生して、綿の苗が大量に枯れたときには、城東人民公社内の各生産大隊や生産隊は協力して、積極的に防除に当たって、大急ぎで苗を植え直した。第七生産隊では、何度も植え直したために苗が足りなくなった。しかし社員たちは、自留地の綿の苗を自分から進んで集団の畑へ運んできて植え直した。こうして社員たちは、積極的に集団生産に力を入れたので、その夏に数十日にわたって降り続いた大雨にも、年寄りから女の人に至るまで、力を合わせて一斉に排水溝を掘ったために、畑に溜っていた水も瞬く間に排水することができたという。こうした社員大衆の積極的な取り組みによって、虫害と水害とに打ち勝って、農作物の力強い生長を保証することができた、と革命委員会の資料は述べている。そしてこの一年の城東人民公社は、不利な条件の度重なりにもかかわらず、四清

運動の戦闘的な洗礼をうけて、またも農業の豊作を勝ち取ることができた。農作物のなかでも食糧は、一〇アール平均八七五キロ収穫することができたという。これは、四清運動前の一九六三年の五八八キロに比べると、約五〇パーセントの増収となった。また、綿花の場合も約一〇パーセント増加したと記している。

一九六六年の夏、中国共産党中央委員会は、毛沢東主席が自から主宰して定めた「通知」（プロレタリア文化大革命のための理論、路線、方針、政策を示した綱領である。そしてこれは、ブルジョア司令部が文化大革命を弾圧するために持ち出した「二月要綱」を徹底的に批判して、全党員および全国の人民に対して、闘争の矛先を党内に潜り込んでいるブルジョア階級の代表者に向けて、「身邊に潜む反動分子」を暴くように呼びかけたもの）は、プロレタリア文化大革命の烈火を燃え上がらせた。城東人民公社の社員大衆と幹部たちは、四清運動の激しい闘いを経てのち、ふたたび漲る政治的な情熱をもって、プロレタリア文化大革命のなかでの農業生産に身を投じた。こうした取り組みに対して、毛沢東主席は、

「今度のプロレタリア文化大革命は、プロレタリア階級独裁を打ち固め、資本主義の復活を防ぎ社会主義を建設するうえで、まったく必要であり、きわめて時宜に適ったものである」⁽⁶⁾

と指摘している。こうした城東人民公社の状況からみて、この四清運動は、資本主義勢力と封建勢力とに手痛い打撃を与えて、城東地区の農村の社会主義の陣地を強めることができた。しかし、一方では、上海市街地に住んでいるブルジョア階級の代理人たちの、しつこい妨害と破壊を受けたために、四清運動の任務を規定している「二十三カ条」（四清運動の方向を正して、「十カ条」の基本的な精神を重ねて明らかにしたもので、農村の社会主義教育運動の指針）を、完全には達成することができなかった。このことは、城東人民公社の政治、経済、思想、文化のあらゆる領域において、厳しい階級闘争が存在していたことを物語っている。

同時に、こうした階級闘争が明らかに存在していることは、ブルジョア階級独裁の反動分子が相変わらず存在していることであって、その巻き返しが続いていることを示している。そして、公社内の一部の指導者たちは、かれら反動分子の扇動を受けて、いくつかの問題を生起させている修正主義路線をとっていたことになる。一九六六年春の農作業の高まりのとき、ある反動路線の指導者は、プロレタリア階級の政治、経済、思想、文化を語らないで、大衆の生産に対する積極性を労働点数の高さで決めようとして、わずらわしい労働点数のノルマを定めたのである。

とくに重大なのは、ブルジョア階級の上海市における代理人が、「大寨における収量はわずかに四〇〇キロである。上海市では五〇〇キロ以上の収穫を得ているのに、それでもまだ大寨に学べというのか」という出鱈目な言い方をして、大寨に学ぶことに反対したことである。こうしてかれらは、反対のための黒い風を巻き起こしたときに、城東人民公社内にある一部の反動的な指導者も一緒になって、大寨に学ぼうとしている大衆の熱情を抑えようと掛かったのである。このために大寨に学ぶ運動は、城東人民公社内でようやく始められたばかりであったために、またもや反動分子によって冷水を浴びせられるということになってしまった。こうした事実を察知した党中央は、

「これまで、われわれは農村での闘争、工場での闘争、文化界での闘争を行ない、社会主義教育運動を進めてきたが、しかし、問題を解決することができなかった。なぜなら、公然と、全面的に、下から上へと広範な大衆を立ち上がらせて、われわれの暗い面を暴き出すような一つの型態、一つの方式を見つけ出せなかったからである」と指摘している。そして、当面のプロレタリア文化大革命を推進していった。このような形態は、毛沢東主席が自ら興して指導した、プロレタリア文化大革命であっただけに、それは、燎原の烈火のように隈無く燃え広がったのである。

こうして、革命的な大衆運動が起ってくると、資本主義の道を歩んでいる一部の実権派は慌てだした。そしてこれらは、それまでに掲げてきていた路線を一部修正して、ブルジョア階級の新路線として持ち出してきた。上海では、全市の革命的な大衆や人民公社の社員たちまでが、一部の实権派に対して包囲作戦を展開することになった。これら一部の实権派は、農民までが造反に立ち上がったのをみて、慌てて農民たちの造反を鎮めにかかった。しかし、プロレタリア文化大革命は、怒濤の勢いで発展して、大衆の造反、革命の固い意志は押し崩せるものではなかった。かつて貧農や下層中農に属していた社員たちは、公社経営の工場の労働者および機関の幹部たちと連帯して、ブルジョア反動路線の束縛を突き破って、次つぎと闘いの戦列に加わってきた。こうして、城東人民公社に二〇余の大衆組織があらわれたのである。

一九六七年一月、革命的な伝統をもっている上海の労働者階級は、毛沢東主席および党中央の指導と支持のもとに、革命的な大衆と幹部たちとを連合して、上海市人民委員会内の、一部の实権派の権力を奪いとった。この革命を一月革命と呼んでいる。党中央は、こうした上海の一月革命の嵐の経験を総括して、「プロレタリア革命派は連合して、党内の一握りの資本主義の道を歩む実権派から権力を奪取しよう」と全国に呼びかけた。毛沢東主席のこの指示は、城東人民公社の社員大衆を励まして、農村の社会主義教育運動を高めていった。そして、社員大衆は、上海の労働者階級と連帯してこの一月革命に積極的に身を投じて、公社内の奪権闘争を繰り広げた。

このように、城東人民公社の社員大衆は、一月革命の嵐のなかで、文化大革命に入ってから最初の春の農繁期を迎えた。毛沢東主席を中心にした党中央は、時機を移さず、全国の農村人民公社の下層階級の社員や、各クラスの幹部たちに「革命に力を入れ、生産を促すのだ」という趣旨の手紙を出した。ついで、人民解放軍の毛沢東思想宣伝隊は、第一章第二節において述べたように、左派支持のために城東人民公社にやってきた。そして、この党中央の手紙

は、下層階級の社員たちが革命に力を入れると同時に、農業生産を促す農村における主力軍であると述べ、プロレタリア革命路線の農業生産方式である、いわゆる大寨方式であることを強調している。

(二) 諸制度の改革

城東人民公社では、人民解放軍の毛沢東思想宣伝隊の援助をうけて、ただちに春の農作業に力を入れることになった。そして、下層階級の代表が参加する三クラス幹部会議が開かれて、党中央の重要な指示の学習と貫徹、文化大革命のなかで受けた深刻な教育についての総括、および継続革命の精神の発揚などについて、大いに意気込んで春の農作業に力を入れることを討議した。この党中央の指示は、暖かい春風のように社員大衆と革命的な幹部たちとの心に吹き込んだのである。

こうしてプロレタリア文化大革命は、人民公社の社員大衆の心のなかに、深ぶかと滲み込んでいった。またこのプロレタリア文化大革命は、もっともよい党の整頓運動でもあった。したがって、多くの黨員は、階級闘争の風当たりの強い場所で社員大衆と連帯して闘い、プロレタリア独裁を強固にするために貢献した。同時に、実権派の修正主義路線がもたらした重大な問題も、運動のなかでさらけ出された。しかし、路線闘争の自覚が少ない一部の黨員は、継続闘争の革命を行なう自覚に欠けていたし、資本主義の自然発生的な傾向がかなり強い黨員もいた。また、あるものは、この両路線の境界線をはっきりと引くことができず、かつての地主や富農たちの代弁者になったものもあった。したがって、こうした革命と反動との二つの路線の闘いは、いつまでたっても繰り返されるといふ結果になった。このことについて『プロレタリア文化大革命資料集成』には、党中央の指導綱領を次のように示している。すなわち、

「党組織と公社組織とは、どこまでもプロレタリア階級の先進分子によって構成されなければならず、プロレタ

リア階級と革命的な大衆を指導して階級敵と闘うことのできる、生気はつらつとした前衛組織でなければならぬ」⁽⁸⁾

という指摘である。多くの党員や社員大衆は、早速この党中央の教えに従い、城東人民公社の党組織を、プロレタリア階級独裁のもとで、引き続き行なう強固な戦闘の砦にすることは、きわめて差し迫った任務であった。この闘いは、次第に前衛的な組織づくりへと進展して、やがて、社会制度の改革へと踏み切ることになる。差し当たってここでは、諸制度のなから教育制度と、医療制度とについて取り上げてみたい。

① 文化・教育の管理統括

城東人民公社の文化および教育の戦線における社会主義革命は、闘争・批判・改革の大衆運動が深まり発展するなかで、さらに強固なものとして進展した。一九六八年の八月、党中央は、「農村では、労働者階級のもっとも信頼できる同盟者である、貧農・下層中農が学校を管理すべきである」という指示を出した。このことによって、多くの貧農や下層中農に属していた社員大衆は、非常に感動して、眼に涙を浮かべながら、「毛主席が、むしろ貧しい農民に学校を管理しろと言われた」と家から飛び出して知らせ合った。このことは、瞬く間に社員大衆のつくった毛沢東思想宣伝隊が、公社内の中学校、小学校に入って行き、ブルジョア階級の知識分子が独占していた教育の陣地を奪取した。こうして、次第に生気はつらつとした教育革命が繰り広げられた。

この毛沢東思想宣伝隊は、それまでの一部の反動派の教育路線を深く批判するために、公社内の社会調査を行なった。その結果、文化大革命以前は、教育路線の指導的な立場にあった一部の反動派の代理人が、年齢、点数、費用の面で厳しい関所を設けて、社員大衆の子女を学校から締め出して、教育を受ける権利を奪って、教育の場でブルジョ

ア階級の独占が行なわれていたことが、この調査の事実によって明らかにした。したがって、この社会調査は、生きいきとした階級闘争の教育の場であったといえる。それと、この社会調査によって社員大衆が得たものは、「学校を自分たちの手で立派に管理しなければ、権力をしっかりとつかみ取ることはできなくなる」と憤慨したことである。また、社員大衆の宣伝隊は、「文化程度が低くても負けるものか、野良仕事が忙しくても好く段取りをつけよう。経験がなければ創り出せばよい。かならず教育の陣地を占領して、改造してみよう」と断固とした態度を示した。

城東人民公社内の党委員会は、「修学年限は短縮しなければならず、教育は革命を起こさなければならない」という毛沢東主席の指示にもとづいて、宣伝隊が学校に入って指導した経験を締め括り、社員大衆、幹部、教師の三結合による教育革命を指導するグループを公社内につくって、旧来の教育制度と教学方法の改革に着手した。そして、この指導者グループは、社員大衆の子女の就学希望を満たすために、小学校に中学部を設けた。また、各生産隊の特長にもとづいて、基本的には全日制を取っているが、春や秋の農繁期には、農繁休暇を設けて、学生が生産隊に帰って仕事ができるように教育計画を合理的に調整した。こうして、各生産隊の特長に適ったこの新しい学校は、社員大衆から大いに歓迎されたという。

さらに指導グループは、それまでの階級闘争、生産闘争、科学実験という三大革命から離れ、農村の実際から離れていたそれまでの教育内容を改めていった。これにともなって各学校では、教育内容を農村の三大革命の実際に結びつけて、以前は学校に閉じこもっていた革命的な教師や学生が校門を出て、社会そのものを教室とするように、学校運営の方法を切り替えていった。ある学校では、公社内の党書記に教壇に立ってもらって政治の授業をしてもいい、年配の社員大衆には階級教育を、人民公社や生産大隊の事務員には事務要領やそろばんを、民兵の幹部には軍事教育を、「はだしの医者」には医療衛生をというように、それぞれの専門分野からの教育が取り入れられていた、と資料

に記している。

城東人民公社では、各学校とも、教師や生徒が定期的に生産隊や公社経営の工場に入って労働するようになった。このように、人民公社内の学校教育は、農村の三大革命の実践と結びついて、教育学習活動を高めることができた。この学習方法は、学生は現実生きた勉強ができ、さらには実際に役立てることができるというメリットがあって、教育学習の質を大いに高めることができた。このようにして、社会主義的な教育を受けた社員たちが、急速に成長していったのである。

② 医療・衛生の革命

教育革命は、述べてきたように勝利のうちに発展を遂げることができた。同時に、医療・衛生の分野の革命もいきおい盛んに押し進められた。城東人民公社の社員大衆は、修正主義の医療・衛生路線によって、農村の住民がひどい目にあったことを決して忘れることはできなかった。文化大革命が起きるまで、修正主義の反動路線のもとで、医療・衛生部門が都市の少数の人にしか奉仕していなかったために、中国人口の絶対多数を占めている広大な農村では、医師や薬品が絶対的に不足していた。

城東人民公社の革命委員会の資料によると、一九六二年に、第三生産大隊の婦人社員が急病にかかり、やっとのことで医者に来てもらったことがある。ところが、この医者は、大きなマスクを掛けて病人に近寄ろうともしないで、ちょっと眺めただけで、家族に、「この人は伝染病にかかっている、伝染するよ」というと、薬も置かないで帰ってしまった。また、流行性脳炎にかかった子どもが、近くに医者がみつからなかったので、手遅れになって死なせてしまったこともあったという。このように、医者と薬品が足りないために、病気になってもすぐに治療がうけられず、

なかには、不幸にも亡くなってしまふ例が少なくなかった。下層階級に属していた社員が、やっとの思いで病人を町の病院へ運び込んで、そこで親切に扱ってもらえるわけではなかった。第三生産大隊のある青年社員が、喘息で苦しんでいる老社員を診てもらうために病院に連れていったことがあった。ところがこの病院では、「喘息のようなありふれた病気は……」ということで、頭から相手にしてもらえなかった。この老社員は、十六日間入院して、多額の治療費を支払ったが、その挙句に医者から、「あんたの病気は生まれつきの持病だ。治療しても良くならないから、金があったら好きなものでも買って食べなさい」といわれて、病院から追い出されてしまった。この老社員に付き添って病院を出た青年社員は、腹が立って仕方がなく、「ばくち農民自身の医者を必ずつくるのだ」と決意して、医療技術の修得に努めたという。

こうしてプロレタリア文化大革命のなかで、党中央の「医療・衛生活動の重点を農村に置こう」という指示にもとづいて、医療・衛生の革命が繰り広げられた。そして、こうした医療制度の矛盾に憤りを感じた青年社員は、医療技術の講習会を受けたのち、薬箱を背負って「はだしの医者」（いつもは生産隊の社員として農作業に従事し、誰か病人がでると薬箱を持ってきたて治療に当たる）になった。かれは胸を弾ませて、「ばくは貧しい社員の医者になったのだ。すべての大衆から信頼される人になり、この人たちのために立派に奉仕しよう」と自分に言い聞かせた。そして、党中央の指示を熱心に学習して、誠意をもって人民に奉仕する心を培うとともに、医者としての腕を磨いた。その後、この青年社員の熱意ある取り組みが引き金となって、公社内の青年社員のなかに「はだしの医者」になりたいという志望者が増えていった。一九六九年の冬には、城東人民公社が経営する医療機関としての衛生院（病院）が二院、「はだしの医者」は六四人、衛生員を約二〇〇人育て上げて、公社全体に医療・衛生網を張り巡らした。社員大衆は、この「はだしの医者」と衛生員のことを、「田畑で労働し、わしらの寝床まで見て看病し、わしらの家までき

て教えてくれる。あの人たちの話は賛成できる」といって支持するのであった。

一九七〇年には、集団経済が絶えず発展し強化していることを基礎にして、「合作医療」（保険制度の一種である。したがって、毎年わずかの医療費を納めるだけで、これ以外は、生産隊、生産大隊、人民公社の三クラスが、公益金の一部を合作医療費として供出）を実行にうつした。この「合作医療」は、公社員が自発的な意志にもとづいて参加し、病気になったときには、合作医療ステーションで無料で治療をうけることができる。そして、人民公社が管理している「はだしの医者」や衛生院で治療ができない場合は、県や市が経営している病院において治療をうける。その場合の治療費は、当人の経済力と大いに関係があつて、軽減あるいは免除される仕組みになっている。

衛生の面においては、この医療制度と同じように、各生産隊のなかに衛生員を配置して、管内の衛生管理に当たらせている。たとえば、かつての中国は、全国的に住血吸虫（南京虫）病に悩まされていたが、文化大革命以来、衛生革命によって、住血吸虫病の予防と治療とを、積極的に押し進めることになった。このことについても城東人民公社は、党中央の「必ず住血吸虫病を絶滅しなければならない」という革命路線に導かれて、大衆的な予防活動を推進することになったのである。

あとがき

以上において、発展を続けている中国の農村社会について論じてきた。とくに、上海市郊外の城東人民公社を中心において、かつての貧しい農村生活から、集団経済としての人民公社が誕生して、経済的な面においてはある程度の安定をみる事ができた。しかしながら、中国のように長い歴史のなかで培われてきた資本主義的な社会構造は、毛

沢東のように偉大な指導者であっても、そう簡単に社会体制を改革できる筈はなかった。

今日の社会体制は、大別して、資本主義的なものと社会主義的なものとの二つの体制がある。その二つの社会体制のなかに生きる人間は、基本的には孤立的に生存することはできても、相互に生産関係をたもちながらの生存でなくてはならない。この点から前者の資本主義体制は、生産手段の私的所有にもとづいて、すべての生産物や労働力の商品化ということで維持される。したがって、個人としての商品の所有者は、交換を通じてのみ相互に関係をもつことが可能である。そして生産は、この全面的な商品関係、とくに、資本と労働との交換を通じて、剰余価値の獲得を直接目的として遂行される。これに対して、後者の社会主義体制は、一般的には資本主義を越えて、生産、労働、消費の社会化が進んで、富や権力などが個人に平等に分配される仕組みなのである。

中国のそれは、それこそ長い歲月の間、両路線の後を断たない闘争の繰り返しであった。一九二一年に中国共産党が成立して、この両路線の闘いがはじまったのである。そして、この二つの路線は、一九四六年を境に主導権の交替が行なわれることになった。とくに、毛沢東を主席とする党中央は、プロレタリア革命路線を掲げて、農村における土地改革をはじめとして、政治、経済、思想、文化を改革して、社会主義的な革命路線を押し進めた。しかし、資本主義的な道を歩み続けている実権派は、述べてきたように、反動的なブルジョア階級と結託して、革命路線の指導のもとによりやく連帯して立ち上がった人民公社の社員大衆のなかに入って、根強く集団経済の分裂をはかった。これに真正面から対立したのは、いうまでもなくかつて貧しかった社員大衆であった。そして、社員大衆は連帯して、各種制度の改革のために闘いを挑んで、目的達成のために取り組んだのである。

とくに強調して置きたいことは、諸制度の改革のなかでも、医療制度の改革である。すべての制度を改革するに当たって、党中央の指導のもとに、各人民公社の革命委員会の協力があつた。城東地区の場合は、生産隊内の「はだし

の医者」の医療技術を向上させるために、公社経営の衛生院や県の病院に交替で送って勉強させ、また、衛生院の医者
と「はだしの医者」を交替させるなどの方法をとって、政治面と技術面から「はだしの医者」の成長を助けている。
今日では、ほとんどの「はだしの医者」が、農村でよく見かける病気を予防する知識をもつとともに、西洋医学と漢
方医学とを結びつけて治療できるまでに成長している。また、多くの人が新しい針療法を身につけて、関節炎や腰
痛、神経系の病気も治療している。こうして、「はだしの医者」はつねに成長して、なかには、簡単な外科手術もや
れるまでに水準が上がってきている。

また、「はだしの医者」は、小さな空地や田畑の周囲に薬草を栽培するとともに、生産隊の衛生員と一緒に薬草を
採取して、生産大隊で必要な漢方薬を大体まかなっている。かれら「はだしの医者」は、民間医学と薬草治療、およ
び新しい針療法を押し広める努力を続けて、すぐれた成果を上げている。第七生産隊のある婦人社員は、坐骨神経痛
をわずらって、大きな病院で診てもらったがなかなか良くなり、生産隊に帰って漢方薬を服用したところ、一カ月
ほどで治ったという。こうして農村の医療・衛生網は進展して、普通の病気は生産隊で治療できるし、制度化された
「合作医療」は、社員の健康を守る役割を完全に果たせるまでに成長した。こうして社会制度を改革した社員大衆
は、さらに集団経済の成果を上げて、やがて社会主義的な社会体制を構築するのである。

この小論においては、上海市郊外の城東人民公社の社員大衆が、プロレタリア文化大革命のなかで革命委員会を成
立させて、農業生産の方式を農村における思想改革ともいえる大寨方式に学び、農村社会の諸制度を改革して、躍進
に躍進を重ねてきた農民大衆の闘いについて述べてきた。その間（一九五九年～一九七二年）には、党中央の指導も
さることながら、人民大衆のたゆまざる努力の積み重ねがあったことはいうまでもない。

さらに言えることは、こうしたプロレタリア文化大革命のなかで、水利工事や河川改修工事と結びつけて、公社全

体で、七〇・三キロにもおよぶ小川や河川に住んでいる、住血吸虫病の媒体である宮入員の撲滅をはかった。また、無害化の肥だめを二〇〇カ所もつくったし、さらに、井戸を五四〇カ所も掘って、社員たちが井戸水を飲む習慣を身につけるようにした。このようにして、多方面から住血吸虫病の感染を防止したのである。こうした医療・衛生面の改革は、健康維持とともに生産に力を注ぐようになったので、農村経済はますます発展して、農業の多角経営を進展させ、今日の農業、工業、商業の連合が行なわれるのである。このことについては、社員大衆の生活問題を中心に、福利厚生と社会保障との関連において、稿を改めて論述してみたい。

註

- (1) 「人民公社関係資料」嘉定県革命委員会。
- (2) 同右。
- (3) 同右。
- (4) 『中国プロレタリア大革命資料集成』第四卷、二四八頁、東方書店
同右二五一頁。
- (5) 『毛沢東選集』第四卷、四三一頁、外文出版社刊。
- (6) 同右、三四二頁。
- (7) 『中国プロレタリア大革命資料集成』第四卷、二八四頁、東方書店。

参考文献・資料

- 。『毛沢東選集』第一巻〜第四巻、外文出版社刊
- 。『毛沢東著作選』同右。
- 。『中国プロレタリア大革命資料集成』第四巻、東方書店。
- 。『人民画報』一九六一年四月〜一九六四年三月号、中国国際書店。
- 。『中国画報』一九六四年四月〜一九六七年三月号、同右。
- 。『人民中国』一九六七年四月〜一九八二年一〇月号、同右。
- 。『人民公社関係年表』嘉定県革命委員会。
- 。『人民公社関係資料』同右。